

## Contents

- 02 目次  
プロローグ Vol. 25
- 04 特集 新時代の人間の安全保障  
すべての人に安全と尊厳を
  - 10 世界の命を守るため、ともに挑む ベトナム
  - 14 難民との共存を地域の力に ウガンダ
  - 16 栄養改善にマルチセクターで取り組む モザンビーク
  - 18 災害に強い社会へ フィリピン
  - 20 児童労働撤廃に向けて力を結集 ガーナ
  - 22 特別授業 変化・連鎖する脅威に備える
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 24  
カメルーン
- 26 ザ・研修⑬  
障害者が自立できる社会へ
- 28 地球ギャラリー Vol.146 ミャンマー連邦共和国  
写真・文●川畑嘉文(フォトジャーナリスト)  
未来を守る寺院学校
- 34 教えて! 外務省  
知っておきたい国際協力②⑥
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.26

\*掲載されている情報は取材当時のものです。



すべての人に安全と尊厳を——この  
実現に向けてJICAは、「新時代の人間の  
安全保障」を掲げまい進する。ミャン  
マーの寺院学校で無邪気な笑顔を見  
せる子どもたち(写真：川畑嘉文)。



信頼で世界をつなぐ  
Leading the world with trust

## プロローグ Vol.25 緒方先生に学ぶ アティチュード

文・星野俊也

「人間の安全保障 (Human Security)」について語ろうとするとき、私は心のなかでいつも二つの思いに駆られているような気がしています。それは、かけがえのない命を救うために手を差し伸べ合うことは人間としてごく当たり前なはずであり、したがって、突き詰めると人間の安全保障とは理念や政策である以前に私たちのアティチュード(姿勢・態度)にかかわる問題なのだ、というものです。ふり返ると、こうした感覚が恩師の故・緒方貞子先生ご自身のアティチュードに触発されたものであることは間違いないと思います。

緒方先生からの学び——それは私心などとはまったく無縁で、やらなければならないと思われたことには、時に頑固に、自らの責任でぶれることなく力を尽くし、それを「ごく普通なこと」とされる生き方です。難民支援でも開発協力でも、そこには寄り添うべき人々の人格や尊厳にとことん敬意を払い「共にあろう」とする姿勢がありました。

私が緒方先生と人間の安全保障論を最後に対面で交わしたのは3年前の夏、国連日本政府代表部大使・次席常駐代表の命を受けてニューヨークに赴任する前日でした。一緒に昼食をとりながら、私が逸る気持ちを抑えきれず、国連における人間の安全保障アプローチの再活性化に向けた意気込みを話すと、先生はさりげなく「human security aloneじゃなく human security along with others」を「こゝろにないのよ」とおっしゃいました。「自分だけの人間の安全保障でなく、あくまでみんなと共に」。

とても印象的な表現で、先生は人々が共生・共存できる世界を思い描いているようでした。それから、もうひと言、「comfortable Japan along with others」とも。心地よい日本もまた「世界と共に」あってこそ、ということでした。

先生の思いは私たちがけっして「独りよがりであってはいけない」ということだと私は感じ取りました。実際、都合が悪いのか、得てして人間の安全保障の普及に抵抗する国など



イラスト●中村知史

では、その理念に悖る排他的な事態が頻繁に起こっています。また日本も含め、自分たちだけが平和で豊かであればそれでよいといった風潮や世情への、これは痛烈な批判とも考えられます。

ご自身のことを差し置いても苦境にある他の人のために何ができるかを考えること、あるいはまた、私たちも助けられる側におかれるかもしれないという現実を見据えておられるように思います。いかにも先生らしく人間の安全保障の本質を突く大切な学びが思い出されますが、緒方先生からは「それって、当たり前のことですよ」と、そんな声が聞こえてきそうです。

地球上で私たちはみな一つにつながっています。国連代表部での勤務も終わりに近づく頃、世界は新型コロナウイルス感染症のパンデミック(世界的大流行)に見舞われることになりました。私はこれこそ人々の生命、生活、尊厳のすべてにまたがる、まさに人間の安全保障にかかわる未曾有の危機と直感しました。そしてその克服に向け、現地に密着した人間中心の包括的かつきめ細かい国際協力をバイ(2国間援助)とマルチ(多国間援助)で進める意義を訴えてきました。事実、私たち一人ひとりがいがいを気遣い、最も脆弱な境遇にある人々も含め、人々の生命、尊厳が守られ、生活が改善するまで、本当の意味で危機はなくなりません。

当たり前のことが実は最も難しく、「誰一人取り残さない」ためとさまざまな政策は取られても、現実には過酷な状況から抜け出せない人々が残ります。そうしたとき、人間の安全保障アプローチは、私たちがいがいを支え合うための重要な手立てとなるはず。あとは、緒方先生が自らのアティチュードでお示しになられたように、行動あるのみ、のではないのでしょうか。

星野俊也(ほしの・としや)

1959年生まれ。大阪大学教授。前国際連合日本政府代表部大使・次席常駐代表。上智大学在学中に、のちに国連難民高等弁務官を経てJICA理事長を務める緒方貞子さんに師事して以降、国際政治の研究と実務をまたいで活動。専門は、国連を中心とした多国間外交、人間の安全保障など。在米日本大使館専門調査員、日本国際問題研究所主任研究員、プリンストン大学客員研究員、国際連合日本政府代表部公使参事官、大阪大学理事・副学長などを歴任。